

葉集を読む

松岡 隆子

胸熱くして流水の夕景色

安達みわ子

オホーツク海に広がる流水は、北海道から遠く離れたロシアのアムール川河口付近の水が海流に乗って次第に成長しながら、オホーツク沿岸に押し寄せてきたものであるという。壮大な海が白い水に埋め尽くされた景はさぞ幻想的なことだろう。一度見てみたいと思いつながら果たせないでいる。

夕日に染まった流水の光景に声もなく佇む。その神秘の世界は〈流水の夕景色〉としか言いようがない。〈胸熱くして〉に思いが籠もっている。七五五の破調も感動に添っていて心地よい。同時作の〈異邦人と乾杯ドミトリーの春〉では、相部屋の他国の旅行者と旅の感動を分かち合っている様子を爽やかに詠っている。安達さんは連作を得意とされる方だが、今回の作品も力作であった。

恋猫に一語一語を言ひ聞かす

宮当 信行

愛猫家にとつて飼い猫は家族同然である。恋に浮かれて出て行こうとする猫に、我が子に諭すように言い聞かせる。物狂おしい鳴き声をたてて近所に迷惑をかけないようにという思いもあれば、傷ついて憔悴しきって帰ってくる猫の姿を見るのは忍びないという思いもあろう。噛んで含めるように言い聞かせる飼い主の声を振り切つて飛び出してゆく猫の姿が見える。

臘梅や座敷に人の気配なく

西島 美晴

臘梅はその黄色い蠟細工のような半透明の花といい、芳しい香りといい、孤高の趣のある花と思う。庭に臘梅があるだけで冬の庭の景が整う。誰もいない冬座敷は深閑としていて障子に差す冬日が穏やかだ。描写されているのは臘梅と冬座敷だけであるが、深閑とした中に冬の香気が感じられ、一つの句の世界を作り出している。

枯草の枯れきるまではそのままに

田辺 文枝

枯れた草が一面に広がっている様は物寂しい。寒気が募り霜が降りるにつけ枯草は更に枯れてゆく。やがて枯れ尽きるまでずっとそのままにしておこう。日々枯れを深めてゆく枯草を愛しみの眼差しで見つめている。

ふと身近に起こったことに思いが至った。病に倒れた人はそのままにしてほしいと願った。〈そのままに〉ということに強く惹かれた訳が漸く分かった。俳句は時に作者の思いを超えて読者の胸に響く。あらためて俳句の力を思わされた。

昇降機春の花材と乗り合はす

小田 幸子

小田さんは朝日カルチャーセンター教室の俳句講座を受講されている。カルチャーセンターには華道の講座もいくつかある。たまたまエレベーターで花材を抱えた受講生の方と乗り合わせられたようだ。包みから桃の花や猫柳などがはみ出し、出ていたのだろう。フリージアやスイートピー、チューリップなども見えたかもしれない。硬質な昇降機と「春の花材」の取合せは絶妙だ。見過ごしてしまいそうな景を捉えることが出来たのは、小田さんの詩心が張っていたからであろう。

蔵陰に石と見紛ふ残り雪

植原 恭子

石造りの蔵だろうか、蔵の裏は一日中ほとんど日が当たらない。降り積もった雪は何時までも解けず残雪となつて汚れていくばかりである。「石と見紛ふ」という比喩に黒々と汚れた残雪の塊が見える。的確な写生の眼が捉えた景である。

熱燗やほどほどといふこちよさ

晴 涼風

寒い夜は熱めの燗酒を飲むに限る。一口飲んだだけで五臓六腑に沁みわたり冷えた体が芯から温まる。飲むほどにこちよさい気分になり、心の憂さも晴れる。と言うものの私自身は下戸なので実際には分かっていない。

いつも少女のような爽やかな笑顔の晴さんに熱燗は似合わない感じがするが、「ほどほどといふこちよさ」とはいかにも晴さんらしい。何事もほどほどが良い。皆がほどほどに

していれば諍いは起きないだろう。

ゆく春の一睡のあと句に向かふ

由良野斗喜美

花も過ぎ桜葉も降り尽くし日々春が深くなつていくと、どことなく気怠い気分になつてくる。歳時記を読んでも身に入らない。いつの間にかうとうとと眠つてしまう。ひと眠りした後は気分も爽快になり、あらためて明日の句会に出す句を考え始める。「一睡のあと句に向かふ」という真摯な姿勢には目を留めざるを得なかった。

いつせいに声無く翔てり寒雀

宮内 一昭

雀はもともと身近にいる親しい鳥であるが、食物の乏しい冬になると更に身近に寄つてくる。掲句の寒雀は公園の日向や民家の庭の日向に群れていたのだろう。声も無く群れ翔つたところをみると、餌にありつかなかったのかもしれない。寒雀に寄せる慈愛の眼差しを感じる。

その他の印象句

芽吹き初む木々の先なる風の海 鈴木 富代
春荒や用を足すのもままならず 森崎恵美子
枝垂れ梅年とることの楽しくて 加々美敦子
鳴き声のどれも違つて春の鴨 山下なつ子
階段に隅とふところ春の塵 山崎 和音